

ない。肥料にしかならない海星と穂俵はとても食べたものではない。とにもかくにも私は、農耕係将校として何とかその責を果たすことが出来た。

四月中頃になると、復員の情報が乱れ飛んだ。兵隊達は浮足立ってしまつて、少しも農耕に身が入らなくなつてしまつた。五月三日、やっと乙守部隊に宝港集結の命が下つた。宝港は復員船の出る港であつた。ところが不運にも我が中隊は、第二中隊と共に、宝港貨物廠の下宮作業隊と交替を命ぜられた。兵隊達をなだめるには大いに苦労したが、その後約一か月、貨物廠への食糧の陸揚げ作業に従事し、十分な食糧を与えられたお陰で、またたく間に体力が回復し、丸々と肥つてきた。ここでの最後の使役はかえつて良い思い出となつた。

六月十四日、待ちに待つた復員船。リバティー型「ジョンカレット号」に乗船した。そして昭和二十一年六月二十九日、宇品港上陸。同日復員完結。小隊長としての権限からも、そして責務からも解放され懐かしの故郷へ向かつた。

前年の八月十八日、スングレーパターニーの病院で敗戦を知つてからやがて一年になろうとしていた。

## レンバン島追想

新潟県 星野辰司

私は昭和十一年徴集第二補充兵であつた。

昭和十八年七月一日召集・入隊（二十七歳）、十一月三日バンコク上陸、明治節として祝酒を戴いた。忠誠を書い戦友と前途を祝つた。

マレー作戦後の平穩らしい各地に警備。

昭和二十年一月頃、私の所属部隊の系列は次のとおりである。

南方総軍（威） 寺内大将―仏印サイゴン

第七方面軍（岡） 板垣大将

昭南第二十九軍（定） 石黒中将―タイピン

第九十四師団（威烈） 井上中将―スングレパターニ

私は、師団司令部参謀部電報班（暗号班）に勤務し

ていた。暗号による発信電報の組立て、受信電報の翻訳業務である。

扱う電報は暗い情報ばかり、南方軍総司令部比島マニラより仏印サイゴンへ移転、輸送船団の被害等、ビルマではインパール作戦の失敗、いずれも死闘と敗退である。

八月十五日、戦争終結の玉音放送、翌日電報が入り翻訳成文した。ポツダム宣言受諾について、全戦線の敗退、ソ連参戦、特殊爆弾の投下、民族と国体の護持、戦没者及び遺族の心情を思う。万世に道を開かんとす。朕が意を体せよ、と舌衷の詔書であった。

司令部周辺はざわめきである。古参下士官、兵はすでに五・六年の戦歴でくたびれの程、これで帰れるとの情報もあつてか明るさも見えたようであった。戦歴わずか二年の私もやれやれの心境であった。不忠の兵であるか。

日を経ずして降伏式が行われた。スパゲパタニ飛行場で英軍によって執行された。広い飛行場一杯に日本軍将兵が整列、英印兵が要所を固め、我が師団長は軍

刀を外し敬礼して降伏を申告した。受けるは英軍中佐であった。

以下、将校団は十名ずつ一団となり軍刀を外し台上に置き申告した。下士官、兵の列には印度グルカ兵が来て両手を上げた体に武器のないことを確かめた。激しいスコールが来て兵達の心と体を洗い流した。

連合軍の命により暗号電報は禁じられ、生のカタカナ文である。電報班は事務的要員四、五名を残し解体である。私は師団参謀長今村大佐の当番兵を命ぜられた。

スングパタニはマレー半島の北端部である。部隊は転々と南へ移動。日本軍のトラックを見る現地の人達の目は冷たかった。罵声、たまには石を投げられる。日本軍は不徳を重ねていたのだったか。道路修理等労務もした。レンガを並べ少しでもゆがむと初めからやり直し、スコールがきても休めとはいわない。戦中我々は日本軍の捕虜になって労務をさせられた。同じ扱いをするのだといった。それはオーストラリア兵であったとか。

在マレー日本軍は若干の保守要員を配しシンガポール沖レンバン島に集結させられた。島の広さ等は定かではないが、いくらかの住民を近くの島に移し、日本軍を集結したのである。先発の工兵隊が港、道路等を開設していた。食糧も乏しく歩行すらすらとの状態なのに工兵は偉いなと思った。木を伐つて堀立小屋を建て、屋根はニッパ椰子の葉で葺く、アンペラで周りを囲った。

軍司令官、師団長、参謀長の宿舎は各々独立である。執務室、寢所、アンペラを隔て、当番兵の部屋もある。当番兵は二人ずつであるが軍司令官、師団長には調理師（軍属）もいる。参謀長の出身は新潟である。私も新潟、もう一人は作戦時からの者で鳥取出身古参兵である。軍医・兵器・獣医・各部長の当番兵は皆新潟であった。新潟県人は当番兵向きかも知れぬ。気転はきかぬが何でもハイ、ハイである。

入島間もなくビルマから戦時捕虜だったという隊が来た。シャツの背にPWの文字が印されていて国では戦死扱いであるという。口々に自分達は戦死となって

すでに位牌になっている筈、家へはどう帰ればよいのかと聞いていたが間もなく内地へ帰ったようであった。食糧が少なく炊事から来るが分けようがない程である。兵達は島の青いものを食糧の足しにしたので、青い若芽のようなものは採り尽くしたようであった。島にゴム林が少しあって、ある兵は若芽をつんで飯盒で煮て喰った。二、三時間して皆吐いたら、はき出した若芽はゴム状になっていた。

軍医部示達「生きる最低の食糧はあるから麥などは食うな」と、自給の足しにと甘藷とタピオカの苗が来て植えた、風土に合い甘藷の葉っぱと蔓はどんどん延びるので兵達は見逃さず密かにお汁の材料にした。私は浜辺に蔓性のおいしそうな野草を見つけ試食したが、猛烈な下痢である。失敗だった、参謀長には供しなかったのはっとした。

兵が持つて来たのか、島にあったのか、アマーバ赤痢が発生しどんどん増える。私は入島以来食べるもの、飲むもの、食器類を全部煮沸して使っていた。将兵の多くは罹患して雨の中をトボトボと便所通いした。参

謀長も見てか「この宿舎は無事だな、星野頼むぞ」。

中隊で胡瓜を栽培したという。熱地なので四十日位で実になる。暗号班時代の戦友の浜尾君と会った「星野、胡瓜が出来て今朝一本ずつ分けて食べたよ」「よかったね、それで足元は少しはしっかりしたかね」。胡瓜一本でふらつく足元がしっかりするわけではないのだが今にして思うと、お笑いであり、哀れでもある。

潮が引いた時岩についている小さな貝をとってスーブにして飲む。小さな身も食べる、これはおいしく力にもなるような気がした。

干潮の浜でゴカイという虫を掘って餌にして釣りをした。参謀長のお供をしてよくやった、実によく釣れるのだが魚はすばやく珊瑚礁にもぐる、私は米を伝って魚をとりに潜る役である。これはうまくいって、焼いたりスーブにしたり、各部長にも分けたりした。

釣りに興じ潮が満ちて参謀長の脚にひたって冷えるとマラリヤの発作が来る。星野帰ろう、毛布を重ねてふるえを押さえる。軍医を呼んでくれ、汗びっしょりで発作はおさまる。

参謀長は時折私を連れて近くの軍司令官や師団長の宿舎を訪問、懇談する。軍司令官の宿舎は桃山風の造りとかでいろりがあり、自在かぎである。土間に腰かけ式である。調理師が貝のスーブをつくってもてなしてくれた。

数か月は残存の食糧と自給で生きのびたが、やがて米軍から太平洋レイションが支給され、不十分ながらカロリーを維持出来たと思う。

茜色の雲と夕日、夜は月を見、星を眺めた。南十字星とオリオン星座のきらめきは美しかった。思いは同じひもじさと望郷の念のみであった。近くの島からは毎夜踊りの太鼓の音が聞こえた。平和になった住民達の喜びであつたらうか。

開発された設営地に名称杭が立った、曰く「茜が丘」「八紘道」等である。前者の诗情ロマン調、後者の保守皇道派調であらうか。

ある日、参謀長は「巡視に行く。星野ついて来い」。私は靴とコートを持って随行した。ある中隊の前にはしかかり兵達は休養の体である。中隊長を呼べ、語気

も荒い「今日は平日なのに休んでおるのか」中隊長答えて「過日の日曜に作業日程の都合で休めなかったの  
で、今日、代日休暇とし休養させております」「何にッ、兵隊からよい隊長など、いわゆる隊は精鋭部隊でない、引き締めよ」中隊長はいい訳も出来ず、「ハイ、判りました」と云ったようであった。私は一歩退って見ていたこれも当番職の役目であったか。あとできいたその隊長は民間にいた時でも敬われた人だったそう。

米軍よりバテイ船が配船になり、勤務年数、島の開設等に難儀した部隊等の順に梯団が生まれ、続々帰還していった。

古参当番兵・藤縄兵長は一足さきに帰ることになり、その前夜、私は参謀長のひそかな指示で軍医部から葉用アルコール・アンブル一本をもらって適度にうすめ、三人でお別れ慰労の乾杯をした。参謀長の恩情と共に忘れ得ぬこともある。

やがて私達は最終梯団ランクに入り、思い出のレンバン島を後に帰ることになった。病人以外の一般将兵

はリバテイ船の繩梯子である。ある軍医さん、医学書を一杯背負い繩梯子をよじ昇った。数十キロの重さであらう、若き学究軍医の真摯さを見た。

快速の船旅。パシー海峡で台風に遭ったが、帰れる思いは「台風もまた楽し」である。

日本の山々と森が見えてきた。戦禍に荒れたりといえ故国日本は美しかった。

宇品港棧橋を一步一步渡って、日本に帰った実感を  
得たのである。

入隊以来満三年、昭和二十一年七月一日朝、私は家の玄関に立った。年齢三十歳であった。年を経て今年七十七歳である今にして思う。私は戦歴二年、抑留一年、度々生命の危険を感じたことはあったが砲煙彈雨を知らない。体の贅弱な私に運よく勤まった軍務であったらうか。ビルマ、比島、大陸、そして海戦等に直接参戦はしなかったが業務の面ではある程度見たような気がする。

そこここに散華した兵士達の悔恨、そして生還した兵士達の労苦を貴しと思う。

戦争とは、かくかくのものなのだ。殺し合いはやめよう、平和の貴いことを認識しよう。人々の英智によってこの平和を守り維持しなければならないと思う。

## 終戦後シンガポール

### ケッペル収容所

茨城県 松塚才治

昭和二十年八月十五日、松井侍従武官の言葉（陛下の言葉）は司令官田中将閣下より全軍に伝えられた。「耐え難きを耐え、忍び難きを忍んで祖国復興のためにつくしてくれ」。恐れ多くも陛下のお言葉であるとの玉音の伝達を聞いて、集合した万余の将兵は沈黙のうちにむせび泣く。自分達が生きているのに無条件降伏とは、後で知ったのでその時はまだ停戦協定とのみ思っていた。

空襲は止まったが急に今までと違った忙しさがやってきた。裸体で穴掘りをやっているわけにはゆかない。

部隊に戻ると早速大隊長より中隊長へ、各隊へと指示が忙しく下った。近日中に敵軍が接收してくるんだ。

昭南島の全軍がジョロンに集結して、ここで決戦を行うべく各部隊は丸木の掘立小屋の宿舎と倉庫をつくり、糧秣、被服、武器、弾薬など二年分を集積、トーチカも縦横に通ずるように出来上がり、英軍二十五万を殲滅すべく準備完了という時である。兵は夜も昼もなく、休憩とてなく頑張った。これらの若い兵士の努力も消えるのだ。無条件降伏のつらさ。

英軍はジョロンを四日以内に引き払えとの命令。馬來半島のコタチンギへ移動しなければならない。鍛えぬいた若武者、日本兵の身も心も二十四時間連続の重労働に疲れきって夢中で命令のままに動いた。

移動にとり残されてはと誰もが私物を捌いて部隊と同行をはかる。誰かが残って敵軍にすべてを引き渡す役をせねばならぬ。当然、経理士官原田少尉の役である。日頃いばった勇氣はどこへ消えたか。逃げるのは一番早い。真っ先に私物を抱え車に乗ってしまった。

部隊の引き揚げたあととは急に淋しかった。自分は経